

## 「ヨハネによる福音書」を読む 第3回 ヨハネ福音書 第5～6章

2009年5月17日（東京 新宿）

奥田 昌道

「起きよ、床を取りあげて歩め」 閉塞状況を突き破りたい 父が死者を復活させて命をお与えになる 「光輝高霊者」 五千人に食べ物を与える 「第二節 愛は真理を試す試金石である」  
（第四の書 第四章 奉仕） イエスが湖の上を歩いて来られる 永遠の生命にまで至る糧 我は天より降りし活けるパン 十字架と聖霊 後の人たちに伝えていくという役目 祈り

### ●「起きよ、床を取りあげて歩め」

皆さん、お早うございます。お久し振りの方もいらつしやいます。

今日の「ヨハネによる福音書を読む」というチラシを皆さんにひと月ほど前に差し上げてあるかと思いますが、これは私の本当の気持ちを書いたものです。講師からの呼びかけというところにあります言葉をちよつと読んでみますと、

「今回の第5章、第6章は凄いとこです。何度も熟読なさって、その情景を思い浮かべて、このドラマとイエスの語りかけを通して、あなたに何を語りかけておられるのかをキャッチしてください。ここで繰り広げられているのは、過去の出來事、物語ではなく、今の私たちの在る状況の中での語りかけです。私がどんな話をするか楽しみにしててください」

一か月前にこう書いたでしょ。この気持ちが一か月続くかというのが問題なんです。こういうことを書きますと。あの時はあんなに燃えた言葉を書いたのに今は何だと、こうならないようにというのは凄いプレッシャーです。皆さんどうですか、ヨハネの5章、6章を熟読してこられましたか。いや、本当にここは凄い所なんですよ。

ヨハネ伝の5章の所、文語訳と口語訳とありますので、両方をたどりながら行きたいと思えます。まず口語訳を読んで、それから文語訳というふうにいけます。

「その後、ユダヤ人の祭りがあったので、イエスはエルサレムに上られた。  
2 エルサレムには羊の門の傍らに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、そこには五つの回廊があった。<sup>3a</sup>この回廊には、病気の人、目の見えぬ人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた。  
<sup>3b-4,5</sup> さて、そこに三十八年も病気で苦しんでいる人がいた。<sup>6</sup> イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、「良くな



りたいか」と言われた。<sup>7</sup>病人は答えた。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」<sup>8</sup>イエスは言われた。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」<sup>9</sup>すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きました。」  
文語のほうでは4節あたりからみますと、

「<sup>4</sup>それは御使のおりおり降りて水を動かすことあれば、その動きたるのち最先に池にいる者は、如何なる病にても癒ゆる故なり。<sup>5</sup>爰に三十八年病になやむ人ありしが、<sup>6</sup>イエスその臥し居るを見、かつその病の久しきを知り、之に『なんじ癒えんことを願うか』と言ひ給えば、<sup>7</sup>病める者こたう『主よ、水の動くとき、我を池に入る者なし、我が往くほどに、他の人さきだち下るなり』<sup>8</sup>イエス言ひ給う『起きよ、床を取りあげて歩め』<sup>9</sup>この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。」

この状況を思い浮かべてください。「ベテスダ」（ベトザタ）の池の辺に五つの回廊がある。その回廊には、病氣の方々が——いろんな身体障害も含め、いろんな病氣の方々が——ここにびつしりと埋めつくすように横たわっている。なぜそこに横たわっているかという、たまに天使がおりてきて水を動かす時、その池の中に一番先に飛び込んだ者が癒されるといふ、どんな人でも。そのいつくるかわからない、しかしきつとくる、それを待ってたくさんの方がいる。そして、われ先にと飛び込む。最初に行った人は「やった!」というわけで、凱旋將軍みたいに帰ってくるわけで、他の人は「やられた!」という、そういう状況を思い浮かべてください。私はこの状況を見たら、悲しくてしょうがない。なぜ悲しいか。「われ先に」といふ、そこなんです。みんな苦しんでいるんですよ。それぞれが重い荷物を背負わされて苦しんでいる。一番先に入ったやつは救われる。それだけを目標にしてそこに横たわっているという、なんと寂しい情景だろうというのが私の実感なんです。

でも、今もそういう状況ではありませんか。たとえば臓器移植ということを考えたら、何人もの方がリストにあがっていて、たまに適合する人が現れたら、サツといく。時には海外まで出かけて行くわけです。何かちよつと状況が似ているように思います。何も臓器移植に限りませんが、その他さまざまそういう病、苦しみ、それをみんな癒されたい。その気持ちにはわかるんですけども、そこにお互いの愛というものが全然感じられない。

「私が癒されたらいい。自分が癒されたらそれでいい。他の者のことは知らない」と。まあ、考えてみたら神の国も、

「熱心に求めて、一生懸命に力を尽くして、狭き門より入れ」

と言われたら、みんな一生懸命に行く。これならいい。それはたった一人ではありませんから、定員はありません。定員は充足されなくて、天国はガラガラなんです。誰も来てくれないから、イエスさまは嘆いておられるんですけども。この池の状況は全然違う。



たった一人、宝くじみたいな、「ジャンボ宝くじ」みたいなものです。それが宝くじなら笑い話ですみますけれども、病気のことを考えますと、本当に心がいたみます。そこには何の愛も感じられない。しかもこの38年間病の人は言っている、「誰も私を助けてくれる人がいないんです」と。動けない人がたくさんいるということは、それで最初に入るためには、誰か屈強な人がそばについてバーツと、それこそレースみたいに躍り込むのかもしれない。全くわかりません、何も書いてないから。

だから、「さまざまなることを、状況を思い浮かべてください」というのは、そういうことなんです。でも、この38年間病の人は誰も助けてくれる人がいない。全く天涯孤独みたいな姿です。そこにイエスが通りかかれて、その病気が長い38年間——20歳くらいで病気になったら58歳、10歳だったら48歳、生まれながらも38歳——私は今、76歳ですので、ちょうど私の半分です——38という数字に拘こだわるわけではありませんけれども——とにかく永い間、この人にとって人生は何なのかと。38年間、仮に20歳からだとしたら、その一番大事なときがこういう病気で無意味に過ぎすぎしている。イエスは通りかかれて、それをきつとキャッチされたのではないだろうか。

しかし、イエスという方は、このようにたった一人に向けて問答している場面と、それから大勢の群衆がやって来てことごとく癒されたと福音書に書いてある場面と、いくつかあるんですよ。たいていの場合には、そこに居る者はすべて癒されたと、いちいち「手を按おいて癒したまえり」とかいうふうには、特定の個人にはしていない。そうかと思うと、特定のヤイロの十二歳の少女とか、そういった特定の人に目をつけてその方を癒されるという場面があります。

これは、イエスは決して身勝手な思いでなさっていない。5章に書いてあります。

「父が為すべきことを与え給う。父が私に為すべきことを示し給う」

と。カトリック系のフランシスコ会訳聖書の注では、「示し給う」というのは「与え給う」という意味だとわざわざ注記してある。自分が為すべきことを与え給うと。だから、この38年間病に苦しんでいる人を癒せというのが、神さまのご命令だったんでしょね。それで、「床を取りて歩め!」と。まあ大胆にね、38年間動けないような人を、自分で池へ這這つけないような人を捕とらまえて、「床を取りて歩め!」と。言われた。これにも驚くんではありませんか。

さて、この癒された人の姿が私は気に入らない。病気を治してもらって、そのあとイエスのほうからまた改めて捜して、お出合いになるんですけれども。私ならば、38年間苦しんでいた病気を瞬時に癒されたら、もう本当に感謝感激ですよ。

「どうして私なんか目をつけてくださったんですか。どうして、あんなにたくさんの病人がいるのに、私をわざわざ選んで、私を癒してくださいだったんですか。あなたは何ですか? あなたは神のお使いでしょうか、神の人でしょうか? そ



うしたら、たくさんの方々の中から目をつけて私を癒してください。何の神の御意がおありなんでしょうか。それを示してください。私はこれからの生涯をそれに献げます」

と。私は、そう言つて欲しかったんですよ、この38年の病の人に。ところが、どう書いてありますか、そのあと。

「<sup>9</sup>すると、その人はすぐに良くなつて、<sup>10</sup>床を担いで歩きだした。

その日は安息日であつた。<sup>11</sup>そこで、ユダヤ人たちは病気をいやしていた。だいた人に言つた。「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない。」<sup>12</sup>しかし、その人は、「わたしをいやしてください。あなたが、『床を担いで歩きなさい』と言われたのです」と答えた。<sup>13</sup>彼らは、「お前に『床を担いで歩きなさい』と言つたのはだれだ」と尋ねた。<sup>14</sup>しかし、病気をいやしていた人は、それがだれであるか知らなかつた。イエスは、群衆がそこにいる間に、立ち去られたからである。<sup>15</sup>その後、イエスは、神殿の境内でこの人に出会つて言われた。「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはいけない。」

これも大事です。この人の病気は生まれながらものではなくて、何か自分でよくないことに係わつて——性病なのか何なのか知りませんよ、どういう病気なのか知りません——何か道徳的に問題があることに手をそめて、それで病気が出てきた。それがずうつと続いたと思われる。でないと、「もう、罪を犯してはならない」と、そんなことを仰るはずがない。

「もう、罪を犯してはいけない。さもないと、もつと悪いことが起こるかもしれない」

これは、肉体の病が癒された場合のみならず、特に悪霊を追い出していた人たちがいる。その時に、「あとが大事だよ」と言われた。きれいにすつかりお掃除されたら、今度は七つの悪霊がおるから、もつと凄い悪霊軍団が入り込んでくるから、きれいにしていただいたあとが大事だということイエスは、霊界のことに関して言つておられる。だから、神さまの救いの御業にあずかるということは、大変なことなんですよ、そのこと自体が。だから、それを単に、

「病気が治りました。よかつた。変な霊を追い出していた。よかつた。これ

からまたうんとお金もうけをして楽しみましょう」

というようなことでは、何にもならない。そうではありませんか、皆さん。やはり、神さまが目をつけて、本当に目をつけて引っくり返して癒してください。過去に訣別して新しい人生に歩む。それはもう、己れを求めない。後ろ向きの人生ではない。神さまの御国に向かつて、天なる素晴らしいものに向かつて突進しろ。そういうふうな思召しがかかっていると、私は思っています。

ところが残念ながら、日本の宗教というものはみんなそうではありませんか。癒しその



ものを求めている。お金が儲かることそのものを求めている。それが叶えられたら、

「ああよかった。御利益ごりやくがあります。どうぞ、みんなあそこへお参りに行きましょう。」

あなた方みんな幸せになりますよ」

と。その「幸せ」というのは要するに、この世的なものがすべて叶かなえられるというだけであって、それ以上の深いところまではいかない。これは次の所で出てくるんですけども。この38年間の病氣の人に關しては、私はそういう感想をいただきました。

### ●閉塞状況を突き破りたい

別の所では、サマリアの地方で十人の癩病人が癒された場面があります。それは癩病の人たちは隔離されている。ところが、イエスが通りかかれるというので、十人がぞろぞろ出てきた。そして、「癒していただきたいんです」と言うから、「わかったよ、さあ今から祭司の所へ行つて、体を見せなさい」と。癒されたという、治つているという証明書をもらつて、それからモーセの律法のとおりちゃんと献物ささげものをして、一応手続きをしてから社会復帰する。それがモーセの十誡以下の律法に決められている。そのとおりしなさいと。それで、道すがら潔められたということに気づいたんですね、その十人が。一人だけ大声で叫びながら帰つてきた。神を誉め讃たたえながら。他の九人は、言われたとおりに祭司の所へ行つたんでしょ。それは「祭司の所へ行け」と言われたから、いいんだけど。その一人帰つてきた人は——祭司の所へ行こうと思つたらいつでも行けます——まずは、大声で神を讃たたえながらイエスの所へ帰つてきた。そしたら、イエスは何と言われたか。

「癒されたのは十人ではないか。あんた一人しか帰つてこなかったのか?」

と。しかも、帰つてきたのはサマリア人でユダヤ人からは除け者にされていた人だった。神さまの愛を受ける、恵みを受ける、御業にあずかるということは物凄いことなので、そのサマリア人は先ず感謝なんです。

「ああ、ありがとうございます。こんな御業を讃たたえないでいられますようか!」

と言って、イエスの所に帰つてきた。そこから先はもちろん書いてませんけれども。やはり我々人間として、恵みにあずかった時に、それを「当たり前のこと」というふうに受けとるのか、それとも

「普通ありえないことが私の身の上起こっている。これは恵みそのものだ。この恵みにお応えしないといけない。今まで私は知らなかった。閉とざされた世界、我々の閉とざされた世界の中で生活してきた。そこには閉塞状況があつて、それを突き破つてくださった方がいた」

と。だから、この閉塞状況を突き破りたいけれども、はね返されて、この閉塞状況の中でグルグルグルグル回つているのが我々人間の社会ですよ。政治の世界でも何でもね。ところが、そこを突き抜けたら、そこは本当に神さまの靈の空間——雲の上に出ますと太陽が



燦々と輝いていますよ。ジェット機で行ってごらん下さい。下は雨でも、突き抜けたら本当に美しいですよ、雲海が下に見えて光輝いています——そういうところに突き抜けてこい。神さまがそこで生命を与えようとなさっているんだよと。それは本当の生命です。

この閉塞感のある中で癒されたつて、結局は死ぬんです、人間は。がんばったつて120歳だと私は思っています。結局は死ぬんですよ。神さまはこれを突き破った本当の生命の世界を与えたくてしようがない。何とかしてそれを与えたい。ところが、人間は、

「いや、この閉塞感のある所で相対的に幸せに生きられたら、それでよろしい。おまんまがあつて、それなりに健康があつて、お金もそれなりにあつて、小さな幸福があればよろしい。隣人？ そんなことは知りません。私は自分の幸福を追求する権利があります——憲法第13条「幸福追求権」というものが保証されている——だから、その世界にいきます。他は知りません」

という。それが現代社会ではありませんか。その現代社会と、さつきの池の辺ほとりで横たわっている人とそんなに変わらない。人のことは考えないから。まあそんなことを思いました。それでイエスは、今度は責められる立場に立つてしまったんです。

「<sup>16</sup>ここにユダヤ人、かかる事を安息日になすとて、イエスを責められたれば、

<sup>17</sup>イエス答へ給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』」

これが凄いです。彼ら、モーセの律法を守り続けてきたと称している人たちは、

「安息日は何もしてはならない。人を癒す、元気にする、これも労働に相当する。これはしてはならない。癒されたかつたら安息日以外の日に来い。イエ

スよ、あなたも癒すなら他の日に癒せ。安息日はすべからず、これはモーセ

の律法である」

と、これがユダヤ人の当時の宗教家の考えだった。それに対してイエスは、

「わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり」

と。「私の父は今もなお働いておられる。だから、私も働くのだ」と。「生命を与える」というのが神さまの御意なんです。

安息日というのはそもそも何か。人間の業わざを休んで——六日の間はせつせと働く。その時は神さまのことは多分どこかにいつているでしょう——けれども、安息日は自分たちの働きを一切やめて、ひたすらに神さまの生命を受ける、愛を受ける、御力を受ける、御言を受ける。そのようにして本当に神さまに帰っていく。神さまが何をしてくださるかということをしつかりと一日受けとる。そのために安息日がある。神さまが安息日に生命を与えたいという、それをイエスがなさったわけです。「神は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり」と。しかも、イエスは自分で何もしてない。

「神さまが『為せよ、ああしなさい、これを語りなさい』と言われることをそのままお伝えし、御業を行つているだけで、自分から出た業は一つもない」



と言っておられる。それがそのあとに出てきます。そういうことがユダヤ人にはわかりませんから。

神さまのことを「父」ということは、自分は「神の子」ということで、同格でしょ。「これはけしからん、神を冒瀆する」と、これが一つ。それから、「安息日にしてはならないことをやった、律法を破った」と、この二つの罪でイエスを殺そうとした。

だから、人間の側の「熱心」というのはどんなに恐ろしいか。

「律法は神の御意の表れである。その律法を破るやつは神さまに反逆するやつだ。

こいつは生かしてはおけない。殺せ」

と。これがユダヤ人の論理です。それから、神さまは格別尊い方ですから、それと自分がイコールだなんてとんでもない。冒瀆する。この二つで「イエスをいよいよ殺そうとした」と、書いてあります。

「<sup>18</sup>このために、ユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとねらうようになつた。イエスが安息日を破るだけでなく、神を御自分の父と呼んで、御自身を神と等しい者とされたからである。」

「ますますイエスを殺そうとねらうようになつた」とありますけれども、その前に何か彼らの気に入らないことをなさつたのかなと思つて、ヨハネ伝の中で調べてみますと、宮潔めをやっておられる。神殿で商売をやつて、そこが強盗の巣になっている。けしからんと、イエスは神殿でそういう商売をしている者を全部追っ払われた。その時、彼らはすごく怒るわけです。

「こんなことをするからには、何をしてくれるか。この神殿は46年かかつてい

る」

「いや、この神殿を壊してみろ。私は三日で建ててみせる」ということを仰つた。「それはご自分の体のことを指しておられる」ということも書いてあります。多分、それをきつと受けているのだらうと思つて、「ますます」というから、そのこととでだいぶ頭に来ている。「神殿を新たにしてい」く」ということだね。でも今度、こういうことがありましたから、安息日を破るだけでなく、自分を神と等しい者にした。これですます殺そうと思うようになった。

●父が死者を復活させて命をお与えになる

ここからキリストの言葉が出てきます。

「<sup>19</sup>そこで、イエスは彼らに言われた。「はつきり言っておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。<sup>20</sup>父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。」



この「示す」というのは「与える」という意味だということを書きほど言いました。何でも与えてくださる。

また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。<sup>21</sup>すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。<sup>22</sup>また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。<sup>23</sup>すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子をお遣わしになった父をも敬わない。<sup>24</sup>はつきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。<sup>25</sup>はつきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。<sup>26</sup>父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにしてください。さつたからである。<sup>27</sup>また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。

ダニエル書に「人の子」という言葉が出てきます。

<sup>28</sup>驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、<sup>29</sup>善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。

<sup>30</sup>わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。」

ここに、イエスというお方の立場というかな、どういうおつもりで御業をなさり、人々に語りかけていらつしやるかということがはつきり出てます。自分からは何もできない。自分から何もしてない。全部、神さまが示される。神さまが「これを為よ。この言葉を語れ」と、上からいただいたものをそのまま横に流している。自分から何もしてない。

こんなことをはつきり言う宗教家がおるでしょうか。宗教家は、自分がどんなに偉いか、自分がどんなに凄いかということを人々に示して、「だから、ついて来い。だから、金を持ってこい」と言つて、すごく自分を高めていくのがだいたいこの世の宗教家ですよ。そしてみな、「ああ、すごい！」とか言つて、そこへついていくわけです。でも、イエスは、

「自分は何もしない、何も言わない。何もない。ナッシングだ」  
と。本当にそうだと思うていらつしやるんですよ。だから、

「私をクソミソに言つたつていいよ。でも、私の中に宿つていらつしやる聖霊は、私のものではない。これは神さまの霊なんだから、この神さまの霊を穢す者は永遠に赦されない」



と、キリストははっきり言っておられます。「舐めたらあかんぞー！」ということですよ（笑）。神さまを舐めてはいかんですよ、それは。

「人間イエスをいくら罵ったってそれは赦される。しかし、私の中にいらつしゃる聖霊は私のものではない。これを穢したらもう救いはなくなるよ」

と。実はその聖霊がいろんな働きをなさっているんですね、イエスというお方を通して。イエスは器にすぎない。では、単なる道具か、人格はないのか。そうじゃない。イエスほど深く祈っておられる方ありません。時には夜を徹して祈られた。イエスほど愛に満ちた人ありません。イエスほど人間らしいお方ありません。

ところが、そのイエスという方が、

「自分はからっぽだよ」

と言っておられる。それを小池先生は、「無」という言葉で表された。これは「私が無い」ということ。人間は「私」で満ちているんです。「私」がどんなに立派なものか、「私」がどんなに何でもできる素晴らしいものであるか。これを人間は誇りたい。哲学者なら、「私の考えは……」とか言って、みんな「私」なんです。ところが、キリストの場合にはこの「私」を否定しておられるわけです。それを小池先生は

「己を実存的に否定する」

という言い方をされました。つまり、客観的に「ナッシング」ではないですよ。私から見たら、イエスというのは素晴らしいひとだと思っています。ところが、その素晴らしいひと、我々からみたら憧れるようなご自分が実存的には——意志的にと言ってもいい——人間の生き方、自分の在り方を否定している。それを押さえつけて、蹴飛ばしている。そんなフワフワした何もない空っぽな風船ではないですよ。本当に素晴らしいものが充滿しているのに、それを否定して、

「それは神さまがすべて私の中でなさっていることだ」

と。己おのれというものを否定してかかっている。これが

「私に従って来たいと思う者は、己を捨て、己が十字架を負って我に従え」

と言われました。要するに、人間の己おのれというものが、自己中心というのが、いかに罪深いかということイエスは知っておられる。さっきの池の辺に横たわっている人と同じですよ。横たわっていて、救われたいのは当たり前でしょ。救われたいのは当たり前なだけども、38年の病が癒されても、ケロツとしているだけで、全く感謝もなければ何もない。これが人間なんです。エゲツない言い方をしますと、それが人間の本性なんです。イエスの場合はそうではない。一切を神に帰かえしておられる。自分の全存在を、これは神さまから賜った存在で、自分は何もないという。

「19 イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うこと

を見て行うほかは、自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同



じく為すなり。20 父は子を愛して、その為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。21 父の死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かすなり。

22 父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。」

この21節は注意してください。

「父が死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かすなり」

「己が欲する者」というのは、それはやはり神さまの御意なんですね。この38年間病の人に目をつけたのも、神さまの御意だったと思います。しかし、受けとるほうが悪かった。受けとるほうが全くそれを受けとれていない。それから24節にも、

「24 誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信する人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。」

こんな凄い言葉が出てきているんですよ。これは今、語られていると思ってください。二千年前にユダヤ人を前にして語られた、それは事実はそうでしょうけれども、しかし、これは今、我々一人一人に語ってくださいているんです。

「あなたは私の言葉を聞いて、私をお遣わしになった神さまを信じているね」

と。「イエスを信じる」ということは「神さまを信じる」ということなんです。イエスを信じないということは、神さまを蹴飛ばしていることです。というのは、イエスという方は神さまの出店でみせですから。神さまは見えないでしょ。イエスという方は、見える形で表れてくれる。だから、この方を受け入れるということは、背後にいらつしやる神さまを受け入れていることになる。

我々から見たら、見えるイエスさまの背後に、見えない神さま——図に表すとこれは円でもないかもしれない、無限です——無限の神さまがいらつしやる。それがイエスという方において顕れている。このお方を信ずる者は、背後にいらつしやる、このお方を遣わした神さまを信じていることになる。哲学的に「神さまが有る。だから信じる」という、そんなのは信じていない。このイエスという方を本当に受け入れた者は、イエスをお遣わしになった方を受け入れている。イエスを叩きつぶす人間は、神さまに戦争をふっかけて、宣戦布告をしていることになる。だから、

「我と父とは一つなり。子を敬う者は父を敬うし、父を敬う者は子を敬う」

と仰っている。このお方を信ずる者はもう既に永遠の生命を持ち、審判に至らず、死より生命に移っていると。

「24 誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信する人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。」

現在、なんです。皆さん、これは現在も、そうなっているんです。そうでしょ、論理的に

考えても。私はイエスを信じています。

「イエスを信じる者は既に死より生命に移っている」

と約束してください。「ああ昔、あんなことを語られたんですか」なんて、そんな過去の話ではないということです。

「あなたは今もう永遠の生命の中にあります。驚いてください、喜んでください」ということをイエスは今、我々一人一人に言っておられる。更に進んでいきますと、

「<sup>25</sup>誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。」

と。我々は「死にし人」ではありませんか。イエスという方に出会っていなければ、我々はみなこの閉塞状況の中で、あたかも「死にし人」ですよ。「生ける屍しかばね」といえますか——永遠の次元から見たらですよ、この地上ではそれなりに活躍しているかもしれないけれども——永遠の次元から見たら、我々の中には生命はないですよ。必ずここで終わります。「ジ・エンド」というのがきます。ここがもう我々の自然的命の終わりなんです。これが死でしょ。これで虚無に落ちてしまう。

本当に虚無に落ちたら空しいと思いませんか。「慰霊祭」ということをなさるけれども、全く虚無なら慰霊祭なんかやっちゃって意味がない。「黙祷」したって意味がない。もう虚無なんですもの、何も無いんですよ。黙祷したり、慰霊祭をするということは、その方が何か向こうの世界でなお存在しているということを我々は本能的に受け入れているからなんです。でなければ、慰霊祭をやったり、お盆にご先祖が帰ってくるというって、いろいろ行事したりすることは、全くこれは偽りでやっていることになりませんか。偽善でやっていることになる。はつきり「自分は無神論だ」と言っている人が同じことをやっていたら、これは偽善者ですよ。そう思いませんか。全く虚無なことです。頭は虚無だと言っているけれども、心は、霊は「いや、そうではない。必ず向こうの世界で生きているはずだ。だから、ご冥福を祈りましょう」とか、やっているわけですよ。それが当然だと思う。

だから、それがどんな世界であるのか、いかなる現実であるのか、それは我々にはわからない。そのわからないものを、イエスは向こうの世界からここへ現れて来てくれたわけですよ、永遠の世界をひっさげて。そして、ガリラヤのあたりで、

「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」

と。「福音」というのは「救いの音信おとずれ」です。あれだけ憧れていた神の国、永遠の生命、それが今、現実化した。

「さあ受けとりなさい。私とその権化ごんげだよ、かたまりだよ」

「我を食べる、我を飲む」

と6章に出てきます。そんな凄いことが出てきているのに、

「キリスト教とは何でしょうか？」



なんてやっていたら、ナンセンスです。生命そのものなんです。「キリスト教」ではなくて、「キリスト」「生命」そのものです。それが、

「二人、三人、わが名の中へと集まるところに我も居るなり」

と弟子たちに仰った。それが今なんですよね。我々はキリストの御名によって集まって、そこに見えないキリストが立っていてくださる。その立っていてくださる見えないキリストが、この言葉を語っていらっしやる。そういうふうを受けとらなければ、こんな集まりをやっていたって、ナンセンスで偽善ですよ、本当のところ。ただ気休めにはなりません。私は、気休めでは承知しない、そんなのは。

本当にここにイエスが、見えないお方が立っていてくださって、一人一人に語ってくださって、これのリアリティを一人一人に分かち与えてくださる。それは祈りを持って集まった人が祈りをもって集まれば、それだけそれは濃厚になりますよ。疑いを持っている人ばかりが集まったら、それはだめです。やはり霊の世界というのは、そういう一つの吸引力がなければ、バラバラではだめなんです。

イエスが御業みわざをなさる時にも、ヨハネ、ペテロ、ヤコブの三人だけを連れて、そして二階に上って行って、「タリタ、クミ！」とやっておられるでしょ。群衆は疑っていますから、騒々しい群衆の中ではイエスはできない。本当に祈りの中でしかできないわけですよ。そういうリアリティの世界をキリストがもたらしてくださった。それは二千年前から、今もなお脈々と生きている。神さまにとっては、一年も千年も変わらないんですよ。

「二日は千年の如く、千年は一日の如し」

と書かれていますように、時間というものは——我々の観念では遠いとか短いとか近いとか言いますけれども——神さまほうでは変わらないんです。二千年前も今も変わらない。イエスはご自分の生命を我々に与えたくてしようがない。それを素直に「はい」と受けとるか、哲学者のように疑ってかかるか。「私の哲学体系の中には神は入りこめない」なんてやっていたら、

「それは、あなたの哲学体系は死んでいるからです。そんな哲学体系で神さまがわかるものか」

と、私は言いたい。皆さんはそれを素直にお受けとりくださると思っっている。

### ●「光輝高霊者」

ですから、私はこういう言葉を聞くと、本当に嬉しいんですよ。

「ああ、そうか、もう本当に既に生命をいただいているんだ」

と。しかも、ここで語っておられる時はまだ、イエスは生なまの人間イエスとして語っておられる。そのあとで、ちゃんと十字架を通って天に昇って、聖霊を降くだしてくださって、聖霊という姿で今は現れてくださるわけですよ。あの時代だったら、まだ人間自身が罪深いで



すから、直ちに神さまの生命は宿れなかつたんですね。

「幸いなかな、心の清き者、その人は神を見ん」

と言われた。心が清ければ、神さまがお宿りになる。「神を見る」というのは、肉眼で見るとではない。神さまが内に宿つてくださる。そして、共感できる。

「神、わがうちに宿りたまえり」

ということが実感できる。それは心の清い人だという。我々は誰も心が清くありませんので、これはどうにもならんですよ。それが、

「十字架はあなたを潔めたよ」

というのが十字架でしょ。「潔め尽くしたよ」というのが十字架でしょ。

「まだ足りないの？ どうやったたら、潔くなれると思うの？」

とキリストは聞いておられますよ。

「いいえ、自分は潔まりません」

「そうだよ、だから、私が十字架で、あの血潮であなたを完全に潔めた。潔まった

ところに聖霊がくだつてくる。聖霊が吸いよせられてやつてくる」

と。だから、

「あなた方一人ひとり神の宮だ」

とコリント書に書いてあります。神は神殿にお住みになる方ではない。一人ひとりを宮として、そこにお住みになる。イエス・キリストご自身がまた神殿なんです。その神殿なるイエスが、

「お前の中に入りたいよ」

と言つてくださるから、入つてくだされば、私も神殿になるわけです。神殿なら、これを尊ばないといけませんよね。あまり勝手なことはできないでしょ。

そういうことで、このヨハネ伝5章の世界は現在なんですな。

「墓にある者がみんな出てくる」

という。まあ出てきても結構ですけども、我々もキリストを知らなければ「墓にいる」ようなもので、生ける屍しかばねだった。それがちゃんとキリストの御声によつて生命をいただいた。「甦る」というのは、生命をいただくということ。死んでも死なない生命をいただいた。そして輝く。後期高齢者の方がいらつしやいますけれども、私は常にこう言う、後期高齢者というのには、光り輝く「光輝高霊者」という。光り輝いて、しかも高くて気高い、尊い霊の者。これは齢よわいを重ねなければ出てこない。齢を重ねた人間の特権なんです。この光り輝く高くて尊きこの次元を奪い取られたらだめですよ。それは肉体的な面では負けます。でも、内的な輝きは齢を重ねることに現れてくる。そうあつて欲しい。

私の今までの75年はその準備だったと思う。これからのあと4分の1——今まで4分の3をやつてきましたので、75歳で。まもなく77歳ですけれども——これはもう第4四半期



に突入しようとしているわけですね、75歳以上は、素晴らしい次元に入れていただけなんですよ。だから、

「たとえ肉体は衰えようと、内なる人は日々に旺さかんなり」と、輝いている。

「見えないですか？ そう、あなたには見えないの？ だめね！」  
なんて(笑)、それくらいのことです。

「そんなにあなたは素晴らしいの？」

「私ではない。私の中にいらつしやるキリストが素晴らしいんだよ」

と、そう言ったらいい。私なんか素晴らしいくない。キリストが素晴らしい。だから、輝きたもうんだよ。イエスご自身がそう言っておられる。

「自分は何もできない。私は何ものでもない」

と。そしたら、あんなに素晴らしいではないですか。私もキリストのお弟子となって、キリストにあやかる者となった以上は同質です。イエスは神と同質なんです。私たちはイエスさまと同質です。それ以下の者にはなさらないですよ、イエスはケチンボウではないから。ご自分の持つていらつしやるもの以上のもは与えることはできないけれども、ご自分の持つておられるものは全部、与えようとなさっている。それがあの五千人のパンの奇蹟なんです、あとで出てきますように。その次にいきましょう。

「<sup>30</sup>我みずから何事もなし能わず、ただ聞くままに審さばくなり。わが審判は正し、それは我が意こころを求めずして、我を遣し給いし者の御意みこころを求むるに因る。<sup>31</sup>我もし己おかしにつきて証せば、我が証は真まことならず。<sup>32</sup>我につきて証する者は他にあり、その我につきて証する証の真なるを我は知る。<sup>33</sup>なんじら前に人ひとをヨハネに遣ししに、彼は真につきて証せり。<sup>34</sup>我は人よりの証を受くる事をせねど、唯なんじらの救われん為に之を言う。<sup>35</sup>かれ(ヨハネ)は燃えて輝く灯火なりしが、汝等その光にありて暫時しばしよろこぶ事をせり。」

ヨハネは一時的な仮の姿。ヨハネが証したかったのは私自身のことだ。「私は、私のあとから来る方の靴の紐を解く値打ちもない」とヨハネは言いました。

<sup>36</sup>されど我にはヨハネの証よりも大なる証あり。父の我にあたえて成し遂げしめ給うわざ、即ち我がおこなう業は、我につきて父の我を遣し給いたるを証し、<sup>37</sup>また我をおくり給いし父も、我につきて証し給えり。

キリスト・イエスのなさっている御業みわざは全部ことごとく父の御業だと。父が遣わしてくださったからこそ、私は語り、御業を行う。それは父の御業だ。そのことでもう私の身分証明はできあがっているはずだ、ということをおられるわけです。業とそれから、父ご自身と。父の為し遂げしめ給う業と、それから父ご自身と、この二つをもって私を本当のものだということを証明していらつしやるんだということです。



汝らは未だその御声を聞きし事なく、その御形を見し事なし。」  
そうですね。

「<sup>37</sup>……あなたたちは、まだ父のお声を聞いたこともなければ、お姿を見たこともない。」

それはそうです、誰でもそうです。

<sup>38</sup>また、あなたたちは、自分の内に父のお言葉をとどめていない。父がお遣わしになった者を、あなたたちは信じないからである。<sup>39</sup>あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。

現代も聖書研究というのは盛んです。この「聖書」というのは旧約聖書ですけれども。

ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。<sup>40</sup>それなのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしなさい。

これもまことに現代に当てはまりますね。今だったら、旧約聖書と新約聖書を合わせて、聖書研究をさかんにやる。昔の人たちも一生懸命で聖書を研究しているから、救い主はどこから現れるんだろうか、ナザレだろうか、ベツレヘムだろうか、どこだろうかとか、盛んに聖書に照らして全部これを言い当てようとしている。でも、聖書というのは、やがてきたるべき本体、イエスという方を指し示している。

次の6章の所には、パンのことが出てきます。

「あれは徴だ、仮の姿だ。本当のパンは私だよ」

ということを6章で仰います。そのようにすべて旧約聖書の様々なことはやがて現れようとするイエス、そのお方のことを語っている。ところが、その当時の人たちは、宗教家は旧約聖書そのものにしがみついていた。そのものの文字とおり。そういうところに誤りがありました。

「<sup>39</sup>あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。

ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。<sup>40</sup>それなのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしなさい。」

文字、聖書という文書の中に研究して、イエスが見つかるはずがない。

例えば、私は奥田という人間ですけれども、この頃、インターネットで「奥田昌道」を検索したら、たくさんの方が書いてあるそうです。

「最高裁の判事で、スポーツが好きで……」

とか、奥田というのはいくつかの人間だとみな議論している。けれども、誰も私に会おうとして出てくる者はいない。そういうようなものです。仮に私が生命を持っているとしたら、その生命を求めてぶつかって来たら、どんどん流れていくのに。そうではなくて、他の所でいろんなことを捜しているという。まあイエスさまについて言えば、そういうことですよ。本体がここに居るではないか。本体がここに居るのに、そこにぶつかって来ないで、



一生懸命に文書を捜して、「ああだこうだ、何々説によるとこうだ。別の説ではこうだ」と、そんなことをやっている。

さつきも申しましたように、

「神の国は近づいた。天国は近づいた。だから、悔い改めて福音を信じなさい」と。これが伝道の第一声だった。

「今まで待ち望んでいた神の国、それは私（イエス）という方の中に宿っている。それがここにこうして立っているではないか。私の所へ来なさい。そこからどんどん取っていきなさい。文書を研究する必要は過ぎ去った。道徳の時代は過ぎ去った。

生命そのものを受けとりなさい」

と。では、生命を受けとったら、道徳はどうでもいいのか。そうではない。イエスほどの厳しい道徳はないでしょ。山上の垂訓に表れていますように、誰も合格できない。そのくらいに、イエスという方は厳しい道徳、倫理、それをうちに体現しておられる。

ですから、

「信じて救われて、そのあとはゴチャゴチャな生活をしていいいい」

なんて、そんなことは絶対にありえない。本当に神さまの御意を体して、イエスという方と人格的に一つになったら、イエスが歩まれたような歩み方以外はできないはずです。人間だからズレはあります。どうしたってズレはある。しょうがない。しょうがないから、いつもイエスの所に帰ってくるわけでしょ。こうやって集会をやっているのもそうです。

それから、次の6章で申しますけれども、「救い」というのは、今、私たちはイエスを知らなければ「死」です。イエスという方を受けとったら、「生命」になる。轉換します。轉換したらそれで終わりではない。そこから生長していかないといけない。「オギャー」と生まれた赤ちゃんは、お腹の中の胎児とは違う存在です。そこから人間は生長していくでしょ。我々はイエス・キリストという方に出会って、その方に生命をいただくのは、あたかも「オギャー」という第二の誕生——第一の誕生はお母さんのお腹の中から生まれてくる。産声うぶごえをあげて——今度は聖霊をいただくと、第二の誕生です。今まではこの世界（第一の誕生）だった。それがこっちの世界（第二の誕生）へと生まれ変わる。これが「救われる」ということなんです。それはイエス・キリストという方を受けとることによって、そうなる。受けとると、救われてから、本当の生命の世界がここから展開していく。

そしてやがて、この身体を脱ぎ捨てる時に本当の実在界で我々は生きるわけです。肉体を宿としながら、向こうの世界をこっちへいただててしまっているんです、我々は。「救われる」ということはそういうことなんです。だから、「救われる」ということはしんどいんですよ。というのは、救われたって、肉体のままですからね。この肉体というやつは相変わらず自分を主張するんですよ、この地上で生きている限り生存競争の中で。「私」を主張する、そういう肉体を宿としながら、霊は向こうの世界をいただいてしまうから、そこで葛藤がお



こるわけです。だから、クリスチャンの生活というのは、決して楽ではない。流れに逆らって上流へ向かって進むようなものです。滔々たる流れが上流から海へと流れていく。汚物と一緒に流れていく。そのの所に乗っかっていけば楽ですけども、行き着く海は死という海ですね。死の海です。

「生命に至る門は狭く、その道は細く、その道を行く者は少ない。滅びに至る門は大きく広く、その道は広く、そこへ行く者は多い」

とあります。でも、「狭き門」は、これはキリストにおいては「広き門」です。無条件ですから、無条件にキリストはご自分の生命をくださる。生命をいただいて、新しく生まれ変わりますと、まだこの「私」という次元の中に我々は住んでいますから——これを「肉」という——肉というものをいただきながら、ここに新しい霊という——これは「靈魂」ではありません、靈魂ではなくて、神さまを求めてやまない生き方を「霊」という——キリストの霊、神さまの霊、そういう霊に従って生きる。これはローマ書でも「霊と肉」というのが出てきますように。また、ヨハネ伝6章63節に、

「私の語った言葉は霊であり生命である。肉は役に立たない」

という言葉が出てきますように。我々はこの「霊」の次元に生きるようにというふうにならねば、現実には「肉」を背負いこんでいるわけです。だから、そこに闘いがあるわけです。その闘いを己が力でやろうとしたらしんどい。それは全部おあずけ。キリストは神さまに全部おあずけになさっていた。私たちもキリストにおあずけする。

スキー場なんかでも、リフトで上へ登れば楽です。そうやって別の力で引っ張って行ってもらわないと、とてもこの地上での闘いなんて戦えませんよ、別の力が来ないと。わが力ではなかなかだめです。

「41 わたしは、人からの誉れは受けない。42 しかし、あなたたちの内には神への愛がないことを、わたしは知っている。43 わたしは父の名によって来たのに、あなたたちはわたしを受け入れない。もし、ほかの人が自分の名によって来れば、あなたたちは受け入れる。互いに相手からの誉れは受けるのに、唯一の神からの誉れは求めようとしない」

要するに、人間同志のいろんな誉れを問題にして受けるのか。本当の誉れをくださるのは神さまだよと。

あなたたちには、どうして信じることができようか。45 わたしが父にあなたたちを訴えるなどと、考えてはならない。あなたたちを訴えるのは、あなたたちが頼りにしているモーセなのだ。46 あなたたちは、モーセを信じたのであれば、わたしをも信じたはずだ。モーセは、わたしについて書いてあるからである。47 しかし、モーセの書いたことを信じないのであれば、どうしてわたしが語ることを信じることができようか。」



ヨハネ伝ではしばしば「モーセとイエス」ということがコントラストで出てくる。

「律法はモーセによつて与えられた。しかし、恩恵と真理はイエス・キリストを通してやってきた。モーセは荒野でマナを与えた。イエスは霊の糧、生命のパンを与えた」

と。「モーセとイエス」という形でコントラストになって出てきます。

「彼らは律法を大事にしているようで、「モーセ、モーセ」と言っているけれども、本当はモーセの心が全然わかっていない。なぜなら、モーセは私（イエス）を証しているのだから。モーセは私を指し示している。そのご本尊である私を、あなた方は除け者にしようとしているのだからだめではないか」

と、そういうことです。

### ● 五千人に食べ物を与える

次に、6章のほうに行きましょう。6章の所もまた凄い所ですね。この6章は他の福音書とちよつと並行している。新共同訳聖書でしたら、6章の始めの所に「五千人に食べ物を与える」という見出しがあつて、括弧してマタイ伝では14章13～21節、マルコ伝では6章30～44節、ルカ伝では9章10～17節というふうに、それぞれ該当個所が示してあります。

マルコ伝とヨハネ伝が非常に近いものですから、まずマルコ伝を見てみましょう。マルコ伝の6章30～44節です。「マタイ・マルコ・ルカ」というこの三つの福音書を「共観福音書」といいます。同じような角度から書かれている。ほぼ同じような資料を材料にしながら——マルコ伝が一番先だったと言われていますが——マルコ伝を下敷きにしてそれぞれ特色を持った記述の仕方をしている、共観福音書という。

それによりますと、この場面が出てくる前に、ヨハネの首が斬られたとある。あのサロメというのによつて。ヨハネは、ヘロデ王が許されない結婚をしたものだから、「それは怪しからん」と言つて責めた。それで、ヘロデの逆鱗げきりんにふれて、牢屋に放り込まれる。娘のサロメが素晴らしい舞いを舞つたから、「どんなものでも、お前に褒美をやろう」と言う。その母に当たるのが悪くて、「ヨハネの首をもらつてこい」というので、ヨハネの首が刎はねられるという凄惨せいさんな場面が出てくる。それでイエスはそれを聞いて、非常に悲しんで山に退かれるということになる。それがその前にあります。

「<sup>27</sup>そこで、王は衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るようにと命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、<sup>28</sup>盆に載せて持つて来て少女に渡し、少女はそれを母親に渡した。<sup>29</sup>ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、  
やつて来て、遺体を引き取り、墓に納めた。」（マルコ5・27～29）

そのあとに、この五千人の話が出てきます。



「<sup>30</sup>さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。<sup>31</sup>イエスは、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行つて、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。<sup>32</sup>そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行つた。<sup>33</sup>ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。<sup>34</sup>イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。<sup>35</sup>そのうち、時もだいぶたったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、時間もだいぶたちました。<sup>36</sup>人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買に行くでしょう。」<sup>37</sup>これに対してイエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。弟子たちは、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。<sup>38</sup>イエスは言われた。「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」弟子たちは確かめて来て、言った。「五つあります。それに魚が二匹です。」(マルコ6・30～38)

「<sup>13</sup>イエスはこれを聞くと、

ヨハネが首を刎ねられたという、それをイエスの所に来て報告したとあります。

舟に乗ってそこを去り、ひとり人里離れた所に退かれた。しかし、群衆はそのことを聞き、方々の町から歩いて後を追った。<sup>14</sup>イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人をいやされた。<sup>15</sup>夕暮れになったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、もう時間もたちました。群衆を解散させてください。そうすれば、自分で村へ食べ物を買に行くでしょう。」<sup>16</sup>イエスは言われた。「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい。」<sup>17</sup>弟子たちは言った。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」<sup>18</sup>イエスは、「それをここに持って来なさい」と言い、<sup>19</sup>群衆には草の上に座するようにお命じになった。」

だいたい情景は共通しているけれども、イエスが先に一人で行かれたのか、弟子たちを先に行かせられたのか、群衆たちがどのようにしてそこへ辿り着いたのか、そういうところの描写が若干違いますけれども、だいたい似たような情景です。しかも、「五つのパンと二匹の魚」がみんな共通です。

そこで、ヨハネのほうはどういうふうに書いてあるかを見ましょう。ヨハネによる福音書では、洗礼のヨハネが首を刎ねられたことは一切出てこない。6章1節、



「その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。<sup>2</sup>大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。<sup>3</sup>イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。<sup>4</sup>ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。<sup>5</sup>イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、<sup>6</sup>こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。<sup>7</sup>フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。<sup>8</sup>弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。<sup>9</sup>「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」

ヨハネ伝では他のところとは違って、

「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます」

とある。これはここだけなんです。他のところではとにかく、「パンが五つある、魚が二匹ある」と、これだけだったけれども、ここでは

「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなものが何の役に立つでしょうか」

と書いてある。

### ●第二節 愛は真理を試す試金石である（第四の書 第四章 奉仕）

これに関して、私はサンダー・シングの本（『聖なる導き インド 永遠の書』で素晴らしいことを見つけました。これは「第四の書神との対話 第四章 奉仕」という所の「第二節 愛は、真理を試す試金石である」の中の、第六番目の項目にこんなことが出てくる。

《六、多くの者に救いをもたらす偉大な奉仕がなされるときに、わたし「キリスト」はこの世界からはほとんど評価されない者たちを、自分の目的のために選びとることがある。それは、彼らが自らの力と知恵を誇ることなく、わたしに全託し、自分のもつさいな能力がどれほど無価値なものであるかを知って、自分のもつすべてを、人々に向けられたわたしの仕事に注ぎ込むためである。

一人ひとりがどんなに小さな賜物しかいただいていなくても、それを全部キリストに一端献げると、それが素晴らしい神の働きとなって現れてくるということを言いたい。

例えば、荒野で五つのパンと二匹の魚で五千人に給食したとき、わたしが弟子たちの手を借りずにこの奇蹟を行なったことをあなたは覚えているだろう。弟子たちは疑いと当惑でいっぱいになり、群衆を飢えたまま帰そつとしていたからである。あのとき、



わたしに仕えたのは、中風から癒された一人の少年だった。こんなことは福音書に書いてないですよ、「中風から癒された一人の少年」とは。ところが、サンダー・シングとの問答の中で主はこう語っておられる。

わたしの話をききたい一心で、彼はわたしに付いてゆく決心をしたのだ。貧しかった少年の母は、二、三日分の食糧にと、何枚かの大麦パンと乾し魚二匹を布にくるんでもたせた。群衆に食べさせる食糧探しが始まった時に、この少年は自分のもっているものすべてをすぐさま差し出し、弟子たちの足元にこれを広げたのである。小麦パンのよくなはるかに質のよい食物を携える裕福な者たちもいたが、

「小麦パン」というのは上等なんです、「大麦パン」というのはだめなんです。それを子供は持っていた。

彼らは自分の食物を放棄しようとはしなかった。

隠していた。他の者はみんなそれぞれ用意をしていながら、誰も出さなかった。

そこで、この少年の大麦パンとわたし自身の祝福によって、五千人の群衆は最善の食糧を得たのである。》

こんなことが書かれてある。これを読んで初めて、ヨハネ伝で『大麦パン』と書いてあるのはこういう深い意味があったのかと、そう思いました。それで、ヨハネの所に戻りますと、

「9」ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持つている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。10 イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ五千人であった。11 さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。12 人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。13 集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠かごがいっぱいになった。」

この情景をまた想いだしてください。子供が大麦パンを、「こんなのは何の役にも立たないでしょうけれども、どうぞ、これをお用いください」と差し出した。イエスはそれを受けとって感謝の祈りを献げられた。それから、分ち与えられると、減らないんです。減らないどころか、パン屑が十二の籠かごにいっぱいになった。これは絶対に奇蹟です。こんなのはあり得べからざることなんです。でも、四つの福音書に全部これが出てくる。

「五つのパンと二匹の魚、それで男ばかりで五千人、それが満腹した」

というのが出てくる。学者はそれを、「いや、誰もが自分用に持っていたのを食べたんだ」とか、何とかかんとか説明する。そんなのはナンセンスです。イエスがなさろうとするの



は凄いことなんです。これはご自分の体を割さいておられるわけですね。そして、ご自分の体を割いて、しかも有り余るほどに無限無量なんです。無限無量なイエスの生命を分かち与えようとなさっている。これは十字架です。十字架でご自分を犠牲に献さげておられる、その姿なんです。だから、その五つのパンを献さげて祈いのちっておられる、この時にパンとご自分とが一つになっておられるわけです。そして、それを分けても分けても減へらない。無限無量、泉いずみが溢あふれてやまないように、パンが無なくならない。

不思議なことは、旧約聖書のあのエリヤのところにも出てくる。壘ひんの油が減へらないとか、粉こなが減へらないとか、そういう奇蹟きせきがエリヤの時代に出てきている。イエスは、本当に人の見ている前でこれをなさった。私はもうそのとおりに受けてとります。神さまがなさることは時々、とんでもないことをなさる。しかも、何のためになさっているか。これが大事なんです。その意味付けというのが次のところに出てくる。人々はこれに対してどう反応をしたかという事です。

さっきの38年間病やまい気の人と同じような反応の仕方なんです。ついでながら、さっきの38年病やまいの男おとこの話が、今のこの話の次に、第七項目という所に出てくる。

《七、感謝の気持ちに欠けるあまり、どのような祝福が与えられようと、たとえ彼らのために奇蹟を行っても満ち足りない恩知らずな者たちがいる。このような人々は奉仕と祝福の道具には決して使うことができない。彼らは、三十八年間不治の病を患かった後でわたしに癒なされた男と同じである。彼はわたしに感謝することも、わたしを信ま頼ますることもなく、わたしの名を覚える労あつすらとらなかつたからだ。このような人からは、世界は何の祝福も期待できない。あの貧しいやもめのように、自分のもっているものすべてをすすんで投げ出す者からしか、祝福はこないのである。》

38年病の男の人がこんなところに出てきているので、びっくりしました。それから、ついでにこれは「奉仕」ということでありますので、関連してお話しておきます。日本では、「情なさけけは人のためならず」という諺ことわざがありますね。あれは「人に情なさけけをかけるくると、周り回まわって自分に還かえってくる」ということです。「人に情なさけけを施ほすのはその人のためにならない」と、この頃考かんえているようですけれども、そうではありません。「やたらに、人に情なさけけを施ほしたら、その人が増長ぞうちやうするからだめだから、情なさけけをかけなさるな」というふうふうに、現代では解釈かいしやくされているというけれども、そうじゃない。「人ひとにかけた情なさけけは周り回まわって自分に還かえってくる」ということなんです。

そのことを、やはりキリストとの問答もんたうで出てきます。

#### 《第一節 奉仕とは、靈的生命的活動を意味する》(第四の書 第四章 奉仕)

弟子——主よ、奉仕の本ほん当とうの意味はどこにあるのでしょうか。わたしたちは創造主ぞうぞうしゆに仕つかえているがために、創造されたものにも仕つかえるということでしょうか。いったい、虫むしけら同然どうぜんにすぎない人間の助けが、大いなる家族を世話せわされる神にとつて、何か価あ



値があるものでしょうか。それとも、被造物を守り維持するのに、神は人の手助けを必要としておられるということですか。

キリスト——一、奉仕とは霊的生命の活動を意味するもので、愛がせき立てる当然の捧げものである。愛である神は、被造物の世話のために絶えず活動しておられる。被造物、特に神の似姿に造られた人間もまた、決して怠らずにすることが神の願いである。被造物の世話と維持においては、神は誰の助けも要しない。神の助けがなければ何もものも存続しえぬように、神は万物をお造りになったからである。また、人の願いを満たすに必要なものをすべて供給されているのも神である。

他に仕えるということには、仕えている本人が助けられるという大きな利点がある。それは、チベットであなた自身の身に起こったことでもある。厳寒の中で死を恐れたとき、あなたは雪中に倒れて死に瀕している人をみつけて駆け寄り、肩に彼を背負って運んだが、この奮闘によってあなたの体内に熱が生まれ、それが相手にも伝わり、両者ともが救われたのである。彼を助けることによって、あなた自身の生命が救われたのである。奉仕の真の目的はここにある。他人の助けなくたった一人で生きられる者は存在しない。他から助けを受けていながら、できる限りその助けを返そうとしたような忘恩の徒は、誰からも助けられる権利をもたない。》

こういうことが出てくる。これはサンダー・シング自身の上起こったことだといわれている。サンダー・シングはあちらこちらを本当に伝道して歩きましたから、いろんな一歩まちがえれば死んでしまうというような危機を乗り越えて行っている。これもそういうことだったという。もしも、サンダー・シングがその時、その凍<sup>こご</sup>えている人を助けなかったら、あなたも同じように凍える。ところが、勇気を振るってその人を助けようと必死になつて働いた。だから、体が温まって、その熱で凍えた人が甦<sup>よみがえ</sup>って、自分も救われた。奉仕というのはそういうものだ。人間は誰でも助けを受けないで生きるなんてできない。神さまから助けをいただき、人から助けをいただき、やがてまた自分も助けをお返しして、それでグルグルグルグル回っているんだと。そのことを仰っている。

そして、その次に、さっきの五つの大麦のパンの話が出ている。子供が持っていた。中風から癒された少年だったと書いてある。こんなのは証明のしようがありませんけれども、私はなるほどなあと思いました。なるほど、「大麦パン」とわざわざヨハネ伝に書いてるのは、そういう意味があったのかと。小麦パンのような上等なものではなかった。しかも、持っていたのをサッと少年が差し出した。それをイエスは喜ばれた。そして祈って、こんなにたくさんの人たちを養われた。パンの奇蹟です。

それに対しての人々の反応は何ですか。14節です。

「<sup>14</sup>そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に  
来られる預言者である」と言った。<sup>15</sup>イエスは、人々が来て、自分を王にす



るために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでもまた山に退かれた。」

「この人を捕まえておいたら、もうパン問題は解決した」と。こんなふうにして、たった五つの大麦パンで五千人を養って、十二の籠に溢れている。この人を捕まえておけば、もう一切問題なしと。それから、今はローマの支配下にあるが、このローマもやつつけてくれるだろう。要するに、現世の利益りやく、このような閉ざされた世界の中に相対的な幸せ、それだけのためにイエスをスカウトする。イエスを召使めしつかいにしようとしている。「王にしよう」と言ったのは、自分たちがコントロールするために。

「徴」というのはそんなものではない。「徴」というのは、パンの奇蹟を通して見えない何が見えているか。見える御業とか、見える形のものを通して、見えないものが示されている。それをしっかりとつかまえることが、本当に「徴を見た」ということ。イエス自身が神の徴なんです。イエスを見て、「大工の小倅こせがれ」というふうに見る。そうでしょ、ヨセフの子供なんですから。「あれは大工の小倅ではないか。どこであんな知恵が出てきたのだろうか？」と、故郷の人々はみんな不思議がったという。これは全然、徴が見えていない。そうでない人たちは、イエスに初めてぶつかった人は、「凄い人だな」と思っただけで感心はするけれども、「これを捕まえておけば、我々の生活は楽になる」と、そんなふうでイエスを利用してしようとした。これは全然、徴を見てないわけですね。イエスは嘆かれるわけです。

### ●イエスが湖の上を歩いて来られる

その先へいきますと、

「16夕方になったので、弟子たちは湖畔へ下りて行った。17そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに行こうとした。既に暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところには来ておられなかった。18強い風が吹いて、湖は荒れ始めた。19二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。20イエスは言われた。「わたしだ。恐れることはない。」21そこで、彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。」

イエスは一人、山にこもって祈られた。人々は自分を捕まえて王様にしようとした。だから、独り山に隠れられた。祈っておられた。夕方になって、弟子たちは先に湖を渡って行った。「一スタディオン」というのは185mということですよ。ですから、この「二十五ないし三十スタディオン」というのはおよそ、4〜5kmということになります。カトリックの方の翻訳では、「5〜6kmほど漕ぎ出したとき」と書いてあります。

さっきの「デナリ」というのは、労働者の一日の賃金だという。「二百デナリ」というのは、二百人が働いた賃金の二百デナリをもらっても、この五千人をとっても養えるものではない、ましてということですよ。



このイエスが水の上を歩いて来られた場面を誰も信じません。せいぜい、一番信心深い人でも、

「これは復活されたイエスが霊の姿で歩いてこられたのだろう」

と解説している本がある。私はそんなことで限定する必要はないと思う。五千人の人を五つのパンと二匹の魚で満ち足らせるほどのイエスが、今度はご自分の体を霊体みたいな姿に変貌して、湖の上を歩いて来られた。何も不思議ではない。イエスは山上で変貌されたことがありました。モーセとエリヤとが現れてきた。その時に眩い姿に変わられた。祈ればそのような変貌されるイエスは、山で祈って湖の上を歩いてこられた。何の不思議も私は感じない。そして舟に乗られると静かになったという。それをどうして学者たちは人間的な思いで全部限定して解釈するんですかね。そんなことをやったら全然だめです。そのまま受けとればいい。

湖の上を歩いてこられたことはそれだけにしまして、そこから先が大事ですから、その先へいきます。

「<sup>22</sup>その翌日、湖の向こう岸に残っていた群衆は、そこには小舟が一そうしかなかったこと、また、イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気づいた。

この群衆もなかなかしつこいですよ。絶対この人を捕まえようと思つて、群衆も必死になつていた。

<sup>23</sup>ところが、ほかの小舟が数そうティベリアスから、主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所へ近づいて来た。<sup>24</sup>群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来た。<sup>25</sup>そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。<sup>26</sup>イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。<sup>27</sup>朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくなるらないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」

文語訳でいいですよと、

「<sup>26</sup>イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ぬるは、徴を見し故ならで、パンを食いて飽きたる故なり。』

まあだいたい、現代の人はそうでしょうね。こんな凄い方にぶかつたら、絶対これを捕まえて、もう離さないでおこうと。そしたら、「打ち出の小槌<sup>こづち</sup>」ですから、何でも出てくる。やはり日本の方々が宗教に求めているのは、その「打ち出の小槌」ではありませか。自分



の願いは全部かなえてくれる。結局この閉ざされた次元の中で、相対的な自分たちの生存を保証してくれるものならば、政治であれ宗教であれ何であれ、何でも来いなんですよ。それを受け入れる。少々楽しくなくてもかまわないと。そういうのが現代だと思う。だから、現代の人々はこの当時の人々を決して笑えない。同じような形で、

「神さまを信心したら、何があるの？」

「いや、健康でおられる」

「では信じましょう」

なんて。病気になつたら、「だめね、こんな神さまは」と蹴飛ばされる。つまり、御利益なんです。要するに、自分の願いとおりにならなかったら蹴飛ばす。

「神さまの願いは何か？」

というところに標準を置かない。自分が基準になっている。自分の思いで裁いている、判断している。ところが、神さまの世界は、神さまご自身の御思いは何かということには我々にはわからない。わからないけれども、神さまは愛の神さまで、絶対に善である。自分に今はわからないけれども、何か深い思し召しがある。それを受け入れる。どんな条件であらうと、

「主よ、あなたを信じます。あなたなくして私の生命はないからです。あなたに出会うまで私は死んでいました。あなたに出会って生きました。たとえどんな試煉が訪れようとも、私はあなたに食らいついていきます」

「種蒔き」の譬話がありますね。始めは喜んでいただけけれども、いろんな試煉がやってくるとうもろ止めた。それから、育ってきたけれども、他にいろんなものが生えてきた。欲望とか誘惑とかいろんなものがやってきて塞いでしまって、実が稔らなかつた。ところが、唯一実が稔つたのは、良い心でそれをしっかりと保つて、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶという。あの「種蒔き」の譬話は、私たちが救われるというのはどういうことかということ。救われてお終いではない。救われてから生長していかないと。生長していくと、いろんな邪魔がやってくる。試みがやってくる。試煉が訪れる。この世の誘惑がやってくる。経済面でも訪れる。嫁姑の戦いがやってくるとか（笑）、いろいろとあるわけですよ。そういうものの中で、しかしながら、

「御意は何でしょうか？ 御意を示してください」

という、常に「御意は？」という形で自分を預けていくわけです。こつちが判断して、御意なんかわかりっこないんですよ、はっきり申しまして。でも、

「見ずして信ずる者は幸いなり」

とキリストは言つてくださった。生命をくださっている方がそれ以下で満足なさららない。いろんな境遇にありまして、それには何か深い御意があるにちがいない。そう思つて、



すべてを素直に受け入れていく。キリストというお方いつも一如一体であるという、これです。「この姿でおらせてください」というのがすべてなんです。

「主さま、あなたといつも本当に一体であらせてください。あなたから離れたら、私は全然だめなんですから」

と。距離を置きながら、「何かください」というのではなくて、「常にあなたと一つであらせてください。これが私の願いです」

と、皆さん、本当にそのように主さまに申し上げてください。そうしたら、きっと喜んでいただけます。

### ●永遠の生命にまで至る糧

26 ……汝らが我を尋ぬるは、徴を見し故ならで、パンを食いて飽きたる故なり。

27 朽ちる糧のためならず、永遠の生命にまで至る糧のために働け。

これはなかなか意味深重ですよ。『朽ちる糧』はこの地上の糧です。ご飯、パン、その他すべてこの食物というのは体のためにあります。肉体の命を養うのはこのようなパンです。これは大事なことです。

「日々の糧をお与えくださいと祈れ」

と言われた。しかし、それだけで終わっていたら、この地上の命のまま終わるではありませんか。

「朽ちる糧も大事だけれども、朽ちる糧を超えた永遠の生命、天国にまでつながっているような糧を求めて働きなさい」

と。この地上の人たちは「朽ちる糧」がすべてなんです。政治だつてそうでしょ。政治は決して「永遠の生命」の世界のことは語りません。これは宗教に任せます。政治の世界は、みんなが相対的に満ち足りるために、要するに、この世の政治であれ、経済であれ、医学であれ、その他すべてこの地上の閉ざされた我々の肉体の命を精いっぱい養う。120歳まで養う。これがすべてなんです。そして、いわゆる相対的に幸せであるようにと、これを保証しようというのが政治の世界です。ところが、神さまの世界はその限界を突き破って、

「あなた方はそんなところで満足してはいかん。もっと凄い世界があるんだ。これを私は上げたいんだよ」

と言つてこられた。ボールを投げてきたんですよ。それをビシッと受けとれるかどうかなんです。160キロの剛速球をキャッチしてストライク！と、こういうキャッチャーを求めておられる。凄いボールが来ているんですよ。そこに目を向けろよと。その角度で受けとらないといけない。

「そんなものは、私は全然要らない。私はこの地上で幸せに暮らして、死んで茶毘だびに付されて、それで結構なんです」



と。いくらキリストの言葉を投げかけたってだめなんです。ここが開いていない、ここが固く閉ざされている。固い固い壁が遮さえぎっている。この壁をぶつ壊さないといけない。壁をぶつ壊すために、時には病気になったり、時には非常に酷ひどい不幸な目に遭あつてみたり、いろんなことで、

「もう私はだめだ。これなら死んだほうがましだ」

なんて。いや、死ぬのはまだ早い。死ぬのはちよつと我慢して。向こうから何か来ている。ちよつとスイッチをそれに合わせてみない？ 受信機を合わせてみない？ 合わせたら凄いのが聞こえてきて、

「ああ、そうだった。全然今まで聞こうともしなかったし、聞こえなかったものが今入ってきた。ああ、自分がこんな不幸な目にいろいろ遭つてきたのは、それを頂くためだったんだ。むしろ感謝しなくては」

と、そういう体験談があるんです。サンダー・シングの本の中に出てきます。すべての物を奪われて、最後にキリストに出会う。それで彼は言う、

「今やつと、永遠の生命というのがわかりました。私が今までいろんな物を失いましたけれども、もう惜しいとは思いません。でも、なぜ、もつと早く現れてくださったなかつたんですか」

と、彼は聞くんです。それに対して、

「いや、私はずうつとお前と一緒にいた。でも、時期を見計らっていた。一番いい時に姿を現した。お前が求めていたあの時からずうつと私は一緒にお前と歩いてきたではないか」

と、答えておられる。それで彼は満足して、

「わかりました。これから先、生きていくうえで、私があるから頂いたものを失わないようにするにはどうしたらいいでしょうか？」

「絶えず目を覚まして祈っていないかい」

という答えがきている。「絶えず目を覚まして祈っていないかい」と。

ですから、皆さん、地上の相対的なことでいろいろな不幸があります。不平等があります、不公平があります。

「なんで私はこんな星の下に生まれたのか。なんでこんな親父とお袋の間に生まれただのか」

なんてね。いろんな文句があるでしょう。文句はたくさん旧約聖書の出エジプト記の中でも聞かれています。さんざん文句を言っています、モーセに向かって。

「死んだ方がましだった。エジプトの方がよかった。奴隷の方がよかった」

とか、いっぱい言っている。でも、神さまのいろんなそういう試煉という境遇を通して、本ものに出会う用意をしてくださっている。一番いいときにそれをお示しくださっている。



私の場合には、それは23歳のときだった。学者になろうとして学校に残って研究を始め  
てから、

「いったい、自分は何のために生きているのか？」

と、全くわからなくなつた。何のために学問をしているのかと。そんなことが気になりだ  
したら、だんだん体が弱つてきた。保健診療所へ日参するようになる身になりました。時  
には頭も変になりそうになつて、精神科にも行きました。

「あんたは真面目すぎるから、もつとルーズになりなさい」

なんて言われた。でも、「キチガイだ」と言われなくてよかつたけれども（笑）。「真面目す  
ぎるからもうちょっとルーズになりなさい」と。ルーズになれば、それは楽ですよ。な  
れないから苦しんでいるわけですね。まあそんなこともありました。

でも、そうやって、やはり一変壁にぶち当たつて、「もうお手上げ、降参です！」と言つ  
た時に光が射してきてくれた。それを、皆さん、味わつておられると思う。だから、今ま  
だキリストのことを知らない方にも、

「絶望するんじゃないよ。必ず本当のものが与えられるから、今死のうとしないで、

もうちょっと伸ばしてごらん。三年待つてよ」

とか。今は三万人の人が自殺するんですよ、一年に。この経済不況下で、ますますそれ  
が理由で亡くなる方も何人もいるというのを聞いてます。死ぬんだつたら、ちよつとそ  
れを伸ばして——借金取りがたくさん来たりとか、いろんな不幸なことが次から次へと襲  
つてくるでしょう——それを我慢して、本ものを求めてごらん。それを私たちは伝える責  
任があるんですよ。何とかそういう方々に会つて、

「この生命の世界があるんだから、死んだ思いでやつてごらん。そしたら、きつと

道が開けるよ」

と、それを私は申し上げたいんです。

<sup>27</sup>朽ちる糧のためならで、永遠の生命にまで至る糧のために働け。

「朽ちる糧」を求めて、我々がいろんな営みをする事と自分を否定するものではありません  
けれども、それに留まつていてはいけません。それを乗り越えた「朽ちない糧」、「永遠の生命  
にまで至る糧」とは、肉体の命ではなくて、霊の生命を養うような糧だということがわか  
ります。その糧はどこにあるのか。五千人のパンではなかった。あれは徴だった。では、

「あれが示しているのは何だったのだろうか。それを求めて、それを目標にしながら

ら、この地上の生の営み、人生を歩きなさい」

と。私はそう受けとりたい。「永遠の生命にまで至る糧のために働く」とは、それだけを求  
めて働くいうのは、牧師さんの役目ですか、修道院で祈ることですかと。そうではない。我々  
は正にこの現世で生きるわけです。現世で責任をもって生きるわけです。しかし、その生  
きるの単にこの肉体の糧を求めて、それを充足するために生きるのではない。目標はも



つと高いところの糧、「永遠の生命に至る糧」、それが目標であって、その糧をいただいて、「生まれ変わった人間はその糧をいただいて生長していく。そういう生き方をしなさい」

と、そう私は受けとりたい。私はそれを人生でやってきましたから、この地上の仕事をやりながら。この「永遠の生命にまで至る糧」、これはキリストご自身です。

「私は生命のパンであり、このパンを食べる者は死なない」

と言っておられます。だから、あの五千人に与えられたパンは、永遠の生命の糧である神のパンであり、イエスご自身をシンボライズして、象徴している。それがこのあとでは、モーセが荒野でマナを与えられた。あのマナを食べた人は結局は死んでしまった。けれども、私が与えるパン——これは私自身——これを食べる者は死なないよ、と言われた。そこへ行きたいと思います。

これは人の子の汝らに与えんとするものなり、父なる神は印して彼を証し給いたるに因る』<sup>28</sup>ここに彼ら言う『われら神の業を行わんには何をなすべきか』<sup>29</sup>イエス答えて言いたもう『神の業はその遣し給える者を信する是なり』<sup>30</sup>彼ら言う『さらば我らが見て汝を信ぜんために、何の徴をなすか、何を行うか。』<sup>31</sup>我らの先祖は荒野にてマナを食えり、録して「天よりパンを彼らに与えて食わしめたり」と云えるが如し』

この出典は出エジプト記の16章に出てきます。

「<sup>2</sup>荒野野に入ると、イスラエルの人々の共同体全体はモーセとアロンに向かって不平を述べ立てた。<sup>3</sup>イスラエルの人々は彼らに言った。

「我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒野野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている。」

<sup>4</sup>主はモーセに言われた。

「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。<sup>5</sup>ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている。」……

<sup>8</sup>モーセは更に言った。

「主は夕暮れに、あなたたちに肉を与えて食べさせ、朝にパンを与えて満腹にさせられる。主は、あなたたちが主に向かって述べた不平を、聞かれたからだ。一体、我々は何者なのか。あなたたちは我々に向かってではなく、実は、主に向かって不平を述べているのだ。」……



13 夕方になると、うずらが飛んで来て、宿営を覆い、朝には宿営の周りに露が降りた。14 この降りた露が蒸発すると、見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。15 イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。「これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。16 主が命じられたことは次のことである。『あなたたちはそれぞれ必要な分、つまり一人当たり一オメルを集めよ。それぞれ自分の天幕にいる家族の数に応じて取るがよい。』……」

30 民はこうして、七日目に休んだ。31 イスラエルの家では、それをマナと名付けた。それは、コエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウエファースのような味がした。」(出エジプト16・2～30)

それから、夕暮になると今度は、鶉うずらが飛んでくる。この鶉を食べて満腹した。だから、「肉が欲しい、パンが欲しい」と言うものだから、神はそれをちゃんとなさったというわけです。そのことが出エジプト記の16章に出ていますので、またゆっくりご覧下さい。

### ● 我は天より降りし活けるパン

ところが、このパン問答のことで、ユダヤ人たちは、

「30そこで、彼らは言った。『それでは、わたしたちが見てあなたを信じる事ができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。31わたしたちの先祖は、荒れ野でマンナを食べました。』天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」32すると、イエスは言われた。「はつきり言っておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。」

「天からのパン」というのは結局、生命の、本当の霊の生命を与えるパン。モーセが与えたのは肉のパンである。肉体を養うパンである。ところが、神さまが本当に天からのパンとしてお与えになろうとするのは、霊の生命を養うパン、それは私自身である。これがイエスの言いたいことなんです。

「32イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、モーセは天よりのパンを汝らに与えしにあらず、されど我が父は天よりの真まことのパンをお与えたもう。33神のパンは天より降りて生命を世に与うるものなり』34彼等いう『主よ、そのパンを常に与えよ』35イエス言い給う『われは生命いのちのパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。』」

こういう答えが返ってきています。これを更に具体的に、48節を見て下さい。



「<sup>48</sup>我は生命のパンなり。<sup>49</sup>汝らの先祖は、荒野にてマナを食<sup>くら</sup>いしが死にたり。  
<sup>50</sup>天より降るパンは、食う者をして死ぬる事なからしむるなり。  
永遠の生命であると。」

<sup>51</sup>我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。  
我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん』  
ここにはつきりと答えが出ている。モーセが与えてくれたあのマナを40年間食べ続けたと書いてある。ところが、結局はみな死んだ。つまり、肉体の命を養うパンではあつたけれども、本当の永遠の生命というものはまるで縁がなかった。ところが、

「この私(イエス)というパンを食べた人間は死なない。向こう側の次元で永遠に生きる。そういう永遠の生命のパンである。ずうつと地上でそのパンをいただいて、向こうの永遠の世界へと歩いていく。私自身はそういう生命のパンである」と言われている。では、そのパンとは具体的には何ですか。

「わが語りし言は霊なり、生命なり」

と、あとで出てきます。「私を食べる。私の血を飲め」と言われたので、ユダヤ人はますます混乱するけれども、要するに、一如一体、「私と一つになれ」ということなんです、「私と一つになれ」と。

「<sup>52</sup>ここにユダヤ人がいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』<sup>53</sup>イエス言い給う『まことに誠になんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。<sup>54</sup>わが肉をくらしい、我が血をのむ者は、永遠の生命をもつ、われ終<sup>おわり</sup>の日にこれを甦えらすべし。<sup>55</sup>夫<sup>それ</sup>わが肉は真<sup>まこと</sup>の食物、わが血は真<sup>まこと</sup>の飲物なり。<sup>56</sup>わが肉をくらしい我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。』  
これです。

「私を食べる者は私と一つになる。その人は私の中に生きる、私の中に生まれる。私も彼の中におる」

と。だから、頭で信ずるのではない。そのお方が私の中に宿ってください。私はイエスというお方の中に宿らせていただく。「抱<sup>いだ</sup>き抱かれる」という、これが「一如一体」ということです。これしかないよと。この現実を歩いていく者が本当の永遠の生命です。「終わりの時に甦らせる」というのは向こうの世界のことです。何も終末の何千年か後のことではなくて、我々がこの世を去って向こうの世界に往ったときも、我々は霊体をいただいて、そこで永遠に生きる。

そこに至るまでの生命の糧、魂を養う糧です。そうでないと、「オギャ〜」と生まれても、そのままへたつてしまえばだめです。霊の生命がしぼんだらだめですから。霊の生命が生長していく。霊の生命が生長していくときに、この「私」というパン、私の血、生命を



食べ続けなければいけない、飲み続けなければいけないという——何も人食い人種でも何でもありません——イエス・キリストを食べ続ければ、飲み続ければ、一つであり続ければ、そうやって試煉をくぐりぬけて、そして逞しく生長していったあかつきには、やがてこの地上の生が終わる時には、素晴らしい霊体が備えられて、そこで主イエス・キリストに相まみえる。「よくやった!」と。そういう世界だということなんです。私はそれを思うから、光り輝くんです。これが光り輝く「光輝高霊者」の特権なんですよ。

今までのどんな苦しみも、どんな様々の試煉も——子供さんを亡くしたりとか、いろんなことがありましよう——でも、それは全部ちゃんと守られている。ちゃんと備えられている。一切は善へと変えられていく。

「信ずる者にはすべてのこと相働きて益となるなり」

と、パウロはローマ書8章28節で言っています。

「御霊言ひ難き呻きをもて執成し給うなり」

と。今の世というのは本当に惨憺たるものです。しかしながら、そこから贖われて、神の国に入る望みをもって被造物自身が呻いている。これが本当なんです、霊界の真理というのは。これは閉ざされて我々には見えない。

「人新たに生まれずば、神の国に入ること能わず」

と、このヨハネ伝3章でニコデモとの会話がありました。人が新たに生まれる。ここから脱皮して、新しい霊の生命をいただく。いただいた人間はイエス・キリストという生命のパンをくらって生長していく。そういうふうな受けとっていただきたい。

ですから、この6章は何かゴタゴタしているように見えますけれども、そうやってちゃんと繋がるべきところが繋がればいい。ユダヤ人との問答なんかはどうでもいい。彼らはバカですから。というのは、彼らだけがバカではない。我々自身も同じなんです、目を覚まして、目を開いていただかないと。霊の眼を開いていただかないと、見えないんです。だから、

「見えないものを見せてください」

と言って、我々は祈るわけですよ。それはどこで祈るかという、十字架なんです。これなんです。すべてはここから始まる。十字架で私たちの肉、旧きものを全部ここで片づけてある。ここでもう死んでいる。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生きるにあらず」

と。主が十字架にかかってくださったときに——ご自分のためではない——我々自身、私というこの肉、エゴ、これが全部ここで消されている。そして、甦ってくださいった時に、「あなたも主と共に甦っている」と。聖霊となって我々の中に宿ってください。

私は、「祈り」というものは、人によってみな違うと思うんですよ。小池先生は、「十字架を瞑想して、その中に躍り込む」



ということを抑る。肉体の姿は何も変わっていない。じっとしていらっしゃる。全部、意識の中で、心の中で起こっていることなんです。先生は、

「それは内的な行だ。自分をキリストの中へ投げ込む。そうしたら、そこでもう自分が完全に空っぽになっていることに気づかされる。そして、聖霊がどつと流れこんでくる」

と仰る。私はじつとしていた点は同じなんです。先生は「ウワッー！」と飛び込んでいくのが先生流ですが、私はそうではない。これをじつと瞑想していますと、向こうから迫ってくる。

「もうお前のことは全部片づけた。お前を愛しているよ、お前を愛してやまない。何で私がこんな十字架を背負ったのか。祈れば直ちに眩い姿になって、父の御懐みぶところに安らうのが私の本質だ。ところが、それを捨てて、人の姿をとって、そして、人のいろんな悩みを聞いて、病を癒してあげて、いろんな善きことをしたけれども、誰も本気では信じない。それはみんなエゴ、この世の中のエゴ、それを全部、私は十字架で背負いこんだ、片付けた。重かったよ、本当に重かった。でも、それを負いぬいた。

彼らを赦してやってください、彼らは自分の姿がわからないからです。わが霊を御手にゆだねます」

と。それで息を引き取られた。

### ●十字架と聖霊

「その時、神殿の幕がまっ二つに裂けた」

と、マタイ伝には書いてある。「神殿の幕」というのは、向こうの世界とこっちの世界を隔てていた幕なんです。これがまっ二つに裂けて、向こうの至聖所がドツと流れこんできた。これは聖霊のバプテスマです。聖霊がドツと流れ込んでくる。十字架がなければ、幕が裂けないですから。十字架で私たちの中にあつた幕、いろんなところにあつた幕、壁を全部ぶっ壊してください。そうしたら今度は、聖霊がドツと流れってくるんです。これは復活の生命です。

そのあとイエスが弟子たちに四十日間地上で現れたあと、十日間弟子たちは祈っていた。そうしたら、聖霊が火のごとく降って来た。歴史的には、あのようにしてペンテコステが起きました。今、私たちは何も十字架から四十日たって十日間祈り続けるなんてことは要らない。直ちに今どこであっても、この中でも起こる。ここで本当に、

「主さま、あなたはこんな姿としてくださったんですね。あの五つのパンと二匹の魚で与えてやまなかった。これはあなたご自身を十字架で献げて、一人ひとりに生命をくださった。それを食べよ、その血を飲めと仰つてくださっているんですね。」



それを頂けば永遠の生命、無条件なんですわ」と。  
何も条件はない。ただ受けとる、それだけなんです。

「はい、いただきますー!」

と。本当にそれに価しない者を、「価しないにもかかわらず、それでも上げるよ」という、これが恵みなんです。立派な人に褒美をくださるのは報い、報酬です。たくさん働いた人にはたくさんのお金が与えられる。これは報酬です。ところが、

「何も価しない者に無限無量の生命を与える、これが父の御意だから。神さまは愛なんだから、愛は生命を与える。あなた方がここで呻吟しんげんして、そのまま消え去ってほしくない。永遠の生命の世界に生き続けてほしい。それが父の御意だ。わが父の御意は、私のところへ来る者が一人も滅びないで終の日に甦おぼることである」

「<sup>37</sup>父の我に賜うものは皆われに来らん、我にきたる者は我これを退けず。

<sup>38</sup>夫それわが天より降りしは、我が意いをなさん為ためにあらず、我を遣つかし給たまいし者の御意をなさん為ためなり。<sup>39</sup>我を遣つかし給たまいし者の御意は、すべて我に賜たまいし者を、  
我その一つをも失わずして、終の日に甦おぼえらする是これなり。」

とある。だから、「終の日」は、こつちからいえば、「この世を去って向こうの世界で霊体となる」こと。そういう終りの日に甦おぼらせる。これが御意だという。

<sup>40</sup>わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是これなり。わ

れ終の日にこれを甦おぼえらすべし!」

こういう言葉で語られていることは、私が今日語りましたこのことだと思う。何千年も後にくる「復活の時」とか、「最後の審判」の時とか、そんな時を待たずして、我々は地上を去った時に、常にイエス・キリストのいらつしやる輝く世界にサツと迎えられるんです。それに相応ふさわしい姿になっていなければ、迎むかえられない。

というの、向こうは眩まぼすぎで、こつちは眩くらずかしくて目が眩くらんでしまうわけです。そういう人はしばらく中間状態のところこで訓練を受けて、それから光に相応あしくなったら、向こうで暮らす。ちょうど、我々が地下の中からパツと外へ出たら、眩まぼいでしょ、太陽がね。目がくらむでしょ。そのように、地上で既に「光輝高霊者」になっていなければ、天国で光の中へ入れないですね。生命はいただいているんです。生命はいただいているけれども、生命に相応あしい姿になっていなければ、向こうの世界に入れなから。しばらく、ちよつと待っているさい、そこで修練を積みなさいと。修練を積んで、だんだん光に相応あしい姿に変えられていけば、「さあ、どうぞ」という順番がくるそうですから。

私はやはりサツと行きたいですよ。小池先生もサツと行ったわけですよ。だから、向こうでサツと小池先生に会いたいと思つたら、今からちゃんと光輝く高霊者の質をいただきたい、そしていつでも召しにあずかる。「私はこの地上で働いただけ働きました」と言えないとね。手ぶらで行つたら恥はずかしいではないですか。「あなた、誰か助けたか?」、「いいえ、



誰も助けません。私は自分が救われて嬉しかったので、そのままじつとしてました」なんて。それだったら、「一ミナをもらって地面に埋めておいた」と同じでしょ。「一ミナで十ミナを儲けました」、「そうかよくやった。十の町を司らせよう」と。「五ミナ儲けました」、「よし、五つの町を司らせよう」と。あれはやはり、「賜ったものをうんと神さまのために使いなさい」ということですね。それがさつきのサンダー・シングが「奉仕」ということを言っているわけです。

ですから、私のしゃべっていることは非常に合理的でしょ。私はこのキリストの世界は非常に合理的だと思う。「合理」というのは、なにも地上の合理ではない。物理法則とか、心理学の法則ではない。向こうの次元ですから。霊の次元のことが語られている。その中に入って考えたら、真に合理的です。そういう角度から聖書をみてください。

あの金持ちの家の門の所で物乞いをしていたラザロの話がある。出来物ができて犬が舐めていた。彼が死んだときに、天使に迎えられてアブラハムの懐へ行つた。紫布を着て威張つて奢っていた金持ちが葬られた。逝つてみたら、火炎の中、地獄だった。はるかに見上げたら、アブラハムの懐にラザロが居るではないか。

「おい、ラザロよ、来てくれよ。喉を冷やしてくれ。ここは火炎で苦しい」と。そういう、ルカ伝の中にある譬話たとえばなしですけれども。あれは本当だと思う。アブラハムが言うには、

「あんたは、地上でさんざんいい目をしてきたから、ここ(地獄)でちょうど引き合うんだ。ラザロはさんざん地上で辛い目にあつてきた。だから、ここ(天国)で彼は安らつている。こっちからそっちへ行こうと思つても行けないし、あんたからここへ来ようとしても、深い淵が横たわつていて渡れない」

と。だから、どうしようもない。その金持ちは何と言つたか、

「わかりました。あきらめます。しかし、地上にはまだ五人兄弟が残っています。そいつらも私と同じ目にあわないように、ラザロを甦らせて伝達させてください」

「あかん、あかん。ラザロが甦つたって、聞くものか。あんた方にモーセというのが居つたではないか」

「いや、モーセがいくらものを言つたって、そんなのは信じません。やはり、陰府よみの世界から、向こうの世界から甦つてきた者が、こうだと言つたら、絶対信じますよ」

「いや、モーセを信じない人間が、そんな陰府の世界から生き返つてきた者がいくら言つても、絶対信じない」

と。そういう話が出ている。ドスエフスキーか誰かが、

「キリストがもう一度現れたら、この世の人はやはりもう一度、十字架に付けてし



まうだろう」

ということをやっている。要するに、人間というのは、煮ても焼いても食えない、自己中心の肉、それが蔓延まんえんしているところにもう一回、キリストが現れてきても、やはり同じようにやる。

ですから、いかにこの「新しく生まれる」ということが大事か。

「人、新たに生まれずば、神の国を見ることができない。神の国に入ることが

できない」

と。しかも、イエスは仰った、

「おきなじ幼児の心だよ。幼児の心にならないと、神の国に入れない」

と。キリストはとても幼児を可愛がられました。「天国はこの子供たちのものだ」と言われた。

### ●後の人たちに伝えていくという役目

そういうことですので、ぜひ、ヨハネ伝をそういう角度から——やはり凄いものでしょ——感動しながら、こういうふうを受けとつていきますと、この物語、ここに描かれている情景が向こうから切り込んできてくれる。

今のことです。皆さんはもうイエスという方を信じたら、イエスを受けとつたら、もうその世界に入れていただいているんです。目下、向こうに向かって突進している。

「私は今日も、明日も、その次の日も進み行くなり。父は今に至るまで働きた

もう。私も働くんだけ」

とイエスは仰いました。だから、寝そべっている人生ではない。有閑（勇敢？）なる人が働く人生なんです。働くことによつて健やかにされる。他の人も幸せにしていく。

「定年になって、あとはもう毎日が日曜日でうれしくて、ゴルフして、何かして遊んで……」

なんて、「バカか!？」と言いたくなる（笑）——言いませんけれども——結局、この世界で満足しているのではありませんか。我々にはもつと尊いものを神さまが差し出しているのだから、そこに目覚めてくださいよと。その証人——その私は第1号か、第2号か知らないけれども——小池先生が第1号だったなら、私は第2号。皆さんもそれぞれ、第3号でもいいですよ。ナンバー2でも、ナンバー3でもいいですから、質はキリストの生命をいただいでいく。しかも、自分の力ではありません。本当にこの十字架を前にして、祈っておられたら、向こうから迫ってきてくださる。

「私はお前の中に宿りたい。お前と住すみ処を一緒にしたい。向こうに行つて用意

ができたなら、迎えにくるから」

と、ヨハネ伝14章に書いてある。全部、キリストの側の愛が先なんです。キリストの側から働いてくださる。私たちは邪魔しないだけです。マリアさんだつて、キリストのほうか



ら宿られたわけです。マリアさんが呼びこんだのではない。全部、向こうからの御業です。我々は邪魔しないで、スツと受け入れたらいい。そうしたら、変貌して向こうへ連れて行っていただける。上からの力が来てますから、この世でどんな辛いことがありましても、耐えていけるんです。必ず耐えていける力がやってくる、慰めがやってくるんです。

さっきの讚美歌312番「いつくしみ深き」も、そういう心で歌っていただきたい。「悩み悲しみに沈めるときも」イエスは来てくださると。「ああ、来てくださるのかなあ？」なんてではなくて、

「今、現に来てくださっているよ、お前と一緒にいる。悲しみは喜びに変わるんだよ。涙は喜びの感謝の涙に変わるんだから」

と、常に現在なんです。

「神の国はあなた方の心の中にある。神の国はあなた方のただ中にある。あなた方一人ひとり神の宮である」

と言われた。宮は、何が住んでくれるの？ キリストという素晴らしい霊なるお方が住んでくださる宮です。こんなお宮さんをいただいたら、あっちこっちの神さまを拝まんでもいいですよ。お宮なんかに行かなくても、この自分の中の神さまを拝んでください。

このヨハネ伝6章のしめくくりで、「私を食べる者は……」と仰ったから、彼らは躓くんですね。弟子たちも躓いた。

「<sup>57</sup>活ける父の我をつかわし、<sup>58</sup>我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。天より降りしパンは、先祖たちが食べてなお死に如きものにあらず、此のパンを食うものは永遠に活きん」……<sup>60</sup>弟子たちの中におおくの者これを聞いて言う『<sup>61</sup>こは甚だしき言なるかな、誰か能く聴き得ん』<sup>62</sup>」

「<sup>63</sup>からだを食べろ」とか、「血を飲め」とか言うから、それで呟いた。

<sup>61</sup>イエス弟子たちの之に就きて呟くを自ら知りて言い給う『このことは汝らを躓かするか。<sup>62</sup>さらば人の子のもと居りし処に昇るを見ば如何に。<sup>63</sup>活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、<sup>64</sup>霊なり、生命なり。』

イエスの語られた言は言語ではない。霊であり生命である。霊の次元のもの、天の次元のもの、生命を与えるもの、これが私の言だと。言語ではない。その中に宿っているもの——何か実体ですね——それを受けとる。それでないと、いくら言語学的に研究したってだめだよ。

「私の語った言は霊なり、生命なり」

「我は道なり、真理なり、生命なり」

とも仰いました。だから、見えるお姿のイエスを通して、見えないイエスという本ものを見ていただく。言葉を通していただく。言葉の中にイエスが宿っておられる。そういう形でそ



のお方を受ければ、その人は霊なる生き方をしている。もはや、肉なる自己中心、この世界的な——これは死に至る生き方です——そうではなくて、この霊なる次元の生き方、上に向かつて生きていく生き方です。そして、自己中心ではなく、神中心である。本当に永遠の世界につながる生き方、それをさせてくれるのが、神さまの、キリストの言葉なんです。「わが言は霊なり生命なり」という。

だから、我々の信仰、日常生活は、聖書の特にキリストの言を離れてはありえない。それを強調しておきたい。私たちは所詮、この地上におります間は、体を宿としておるときはどうしても限界の中にある。それに被われていきますから、思考だつて何だつて、全部見えるところで考えてしまう。見えるところを突き破つて、向こうの見えない世界をリアルに体で受けとらせてくれるのは、キリストの言葉です、それを祈り心で受けとるんです。そうすると、

「これが本当のものだよ、見えるものに惑わされてはいけない。見えないものをつかりつかんでいくことだ」

「見ずして信する者は幸いなり」

というのがそれですね。

「肉眼で見えなくとも、霊の眼でしっかりと捕まえていきなさい。そして、それにくらいついていったら、必ずあなたは水の上を歩いていけるようなものだ」

と。そうでしょ。我々はこの見える世界の中にいきながら、見えない世界を歩いていくのは、水の上を渡つていくようなものですよ、本当に。私はそう思いますね。よその人からみたら、「あれはおかしいのではないか」と言われても、いいくらいなんです。でもそれをリアルに、<sup>まこと</sup>「真なり、然り」といつて生きていくのが私たちなんです。

だから、「キリスト教」だとか、「何々派」だとか、そうじゃない。私は要するに、イエス・キリスト、イエス・キリストご自身です。これに出会う、この聖書を通して、祈りを通して。そして、その方と本当に一つになって生きていく。こちら自身は見なくていい。こっちはでき損ないの、真つ黒の、タドンかもしれない、石炭かもしれない。聖霊が燃えてくれば、光輝く姿になって、他の人をも光り輝かせていくという。これはどこまでもキリストから流れてくる。イエス・キリストから流れてくる。そういうふうな受けとつて下さい。良心的な人ほど自分を吟味して、

「私は相応<sup>ふさわ</sup>しいだろうか、相応しくないだろうか？」

と、毎晩毎晩、罪を悔い改めている。僕はそんなことをしたら、神経衰弱になって、やつていけません（笑）。そんなのではないですから。

毎日に、例えば太陽を見れば、「ああ、イエス・キリストは太陽よりもつと凄<sup>しみ</sup>いんだ」と。風が吹いてきたら、「キリストの香りはもつと素晴らしいんだ」とか、すべていろんなものに出くわすごとに、緑している木の葉を見れば、「ああ、キリストの生命は瑞々<sup>みずみず</sup>しいんだ」とか。



水の流れを見れば、「ああ、キリストの霊の流れは爽やかなんだ」とか。

「自然は第二の聖書である」

といわれるように、すべてそういうふうなものに出会うたびに、見えるものを通して見えないものをしつかりキャッチしていく。そういう旅路を積み重ねていく。

それを子孫に伝えていく。我々は子孫に伝えていく責任がある。私の残りの25年はそれなんです。今までの75年というものを土台にして、この後の人たちにこれを伝えていくというのが私の役目だと思っている。皆さんにも、それに賛同していただきたいんです。本当にそう思っていますので。

では、これで終わることにいたします。

## ● 祈り

それでは、一言お祈りいたします。

主イエス・キリストさま、今日はあなたの聖言を通して、このヨハネ伝の5章、6章という、この素晴らしいところを通して、またサンダー・シングのアドバイスを通して、私たちを、この地上の世界を離れて永遠の天界へと旅立たせてくださいました。宇宙旅行をするような思いで、あなたの御国のことを我々は垣間見、味わうことができました。どうぞ、これを一時の感激ではなく、「本当にこれが本当の世界だよ」と。

「誠に誠に汝に告ぐ」と、あなたが「誠に誠に」と仰るときは、本当に生命を尽くし言葉を尽くして、そのように語ってくださいていますから、それを「はいっ」とそのまま受けとつて、あなたと一如一体となつて地上の旅路を、永遠の御国に向かって歩んで行くことができますように。

そして、この地上の旅路が終わったときに、どなたも本当に素晴らしい光り輝く素晴らしい姿になつて霊体を賜り、あなたにまみえることができますように。そのような雄々しい人生を歩ませてください。あなたは世を去り給う時に、

「あなた方はこの世では悩みが多い。しかし、私は世に勝っている。あなた方

は強く雄々しかれ。平安を残していくから」

と仰ってくださいました。どうぞ、見えないあなたを霊の眼で見つめつつ、あなたに導かれ抱かれつつ担われつつ、この地上の旅路を歩ませてください。そして、弱っている方、病を負っている方、苦しい環境の中にいらっしやる方々を、どうぞ、祈りの中で覚えて、祈りを通してその方々の力となることができますように、おん助けください。

主イエス・キリストの尊い御名みなによって、この祈りを御前みまえにお献げいたします。アーメン。

